

令和元年度 第98回全国高校サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術委員 朝霞西高校 山下 暁之

令和元年度第98回全国高校サッカー選手権大会が12月30日（開会式・開幕戦）から1月13日（決勝戦）の期間に開催された。優勝は静岡県代表・静岡学園高校、準優勝に青森県代表・青森山田高校、3位に新潟県代表・帝京長岡高校と栃木県代表・矢板中央高校という結果となった。24年ぶり2度目の優勝を目指す静岡学園高校と連覇を狙う青森山田高校の強豪同士の決勝は、静岡学園高校が3-2で青森山田高校を破り、全国4038校の頂点に立った。

静岡学園高校は一人一人の技術が高く、相手を良く観て判断しプレーをしている場面が非常に多かった。選手の距離間が良いため攻守の局面でのグループ形成が早い。そのためボール保持率が高く、中盤に厚みを作ることができ、多彩な攻撃を展開しゴールを量産していた（決勝までの6試合で19得点）。決勝では、青森山田高校の速いプレッシャーと球際の強さにより前半2点の先制を許し主導権を握られかけたが、前半終了間際に1点を返すと、慌てることなく自分たちのスタイルを発揮し、後半逆転に成功した。両チームともに「質」の高いプレーが多く、非常に見応えのあるゲームであった。観客数も5万6025人と過去最高となり、多くの観客が心に残った決勝戦となった。

静岡学園高校の「上手さ」と青森山田高校の「強さ」（プレミアEASTで優勝し、チャンピオンシップでもグランパスを倒し、日本のトップレベルのテクニカルなチームをはじき返してきた）の両面を持ち合わせるチーム作りを目指していく必要性を感じた大会であった。

今大会の中で本県代表の昌平高校は非常に注目されるチームとなった。埼玉県予選の戦い方と同様に、チーム全体でボールを丁寧に動かしながら前線の選手が流動的かつ連動した動きでボールを引き出し、複数の選手が関わりながら中央やサイドを崩し、多彩な攻撃を展開した。守備では攻撃から守備の切り替えの速さを活かし即座にボールを奪い返して、攻撃につなげている場面が多く見られた。2回戦の興国高校（大阪府代表）での2得点はまさに良い守備からの得点だった。

3回戦は國學院久我山高校（東京都B代表）で、両チームともにポゼッションに重きを置くチーム同士の対戦。拮抗したゲーム展開だったが、後半アディショナルタイムで途中出場の篠田がゴールを決め、準々決勝に駒を進めた。

準々決勝の青森山田高校との試合は力強いプレッシングと個々の高い身体能力により主導権を握られ前半に3失点を喫し0-3で折り返したが、後半に入ると相手のプレッシャーにも慣れ、テンポよくボールが動くようになり昌平高校の時間帯が続いた。2点を返すところまではいったが、惜しくも2-3で敗れた。敗戦はしたものの、リーグチャンピオンの強さを体感したと同時に昌平高校のスキルの高さや攻守の切り替えの速さといった様々な要素が全国でも通用することを証明したゲームであった。

今大会は惜しくも準々決勝で敗退してしまったが、昌平高校としてのステージを一つ積みあげた大会だった。2020年度は関東プリンスリーグでの戦いを経験していく中で確実にレベルアップをしていくこととなるだろう。

昭和56年度第60回大会に武南高校が全国制覇を成し遂げて以来、埼玉県チームは優勝から遠ざかっている。埼玉県のすべてのチームが「全国を基準に」から「全国で勝つことを基準に」へ目標をスライドしていくことと、日常から「インテンシティー」と「クオリティー」をより追及していくトレーニングや試合を積み重ねていくことで、次年度の全国高校選手権大会では埼玉県代表のチームが全国での優勝を果たすことを期待し結びとする。